

---

# 猿

AISIV

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猿

### 【Nコード】

N5487V

### 【作者名】

A I S I V

### 【あらすじ】

ある日を境に大きく運命を変えてしまいました。

(前書き)

微グロあります。

遙か昔、

手を伸ばせば食べ物に届くという楽園のような森に、猿の群れが住んでいた。

その群れの中に、アタムとイウと呼ばれる猿がいた。

2人は仲がよく、いつも一緒だった。

ある日、アタムは腹をこわし、イウを1人残したまま暫く帰ってこなかった。

イウは仕方なく、森を散歩しながら彼の帰ってくるまでの時間を過ごすことにした。

群れから離れて5分ほど歩き少し開けた所に出ると、そこに蛇の姿が見えた。

蛇は何かを狙っていたようだが、イウを見ると逃げていった。

イウは不思議に思って蛇のいた所へ行ってみると、急に目の前に銀色に輝く大きな固いものが現れた。

見たこともない奇妙な形のそれは、高い所から墮ちたように斜めに地面に刺さっていた。

そして、近くに誰かが仰向けに倒れていた。

それは、やはり全身銀色だったが、大きな頭に長い手足で別の群れの猿に思えた。

イウがもう少し近づくと、顔の半分以上もある大きな瞳のない穴のような目がこちらを向いた。

その全身銀色の者にとって不幸だったのは、イウが腹を空かせていたことである。

イウは我慢できず、本能のままその銀色の者の頭に噛みつき、頭を砕き半分食べてしまった。

残りはアタムの為に持ち帰った。この食べたことのない不思議な果実の味を2人で共有したかった。

(後書き)

イウは、持ち帰ったソレを戻ってきたアタムにも食べさせた。

だが、アタムは食べている途中で再び腹をこわし、朝まで帰って来なかった。

数カ月後、

2人の全身の体毛が抜け始めた。

そして、群れの仲間との考え方の違いに、次第にズレを感じるようになった。

やがて孤立した2人は、群れと共に森を移動するよりも、定住する事を望んだ。

だが、視界の悪い森の中では危険な行為でもあった。

イウは、自分が身ごもったのを機会に、この住み慣れた楽園を離れ安全に定住できる場所を求めて森を出ることを決意した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5487v/>

---

猿

2011年10月6日18時01分発行